
帰国渡日児童生徒つながる会

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称、目的など

- ・名称「帰国渡日児童生徒つながる会」
- ・目的

現在、京都府の学校には、国際結婚の家庭に生まれた子どもや、在日外国人、帰国児童生徒などさまざまな形で「外国につながる児童生徒」たちが点在している。そのような生徒たちは、言葉や文化が違うということから、他の日本人の生徒たちとのコミュニケーションが上手くいかず、クラスで孤立してしまうことも多いようである。そのような生徒たちは、普段お互いに出会う機会を持つことが少ない。そのため、共に出会い、活動することを通して、同じようなことに悩んでいる人がいるのだということを知り、そんな悩みを分かち合える友達を得ることができること、また、一人一人が持つ個性を尊重し、自分自身や自分のルーツに自信を持ち、彼ら自身はその国の言語や文化を大切にできるような場を提供することを目的として、2006年度より e-project を利用し活動を続けている。

つながる会の活動は主に長期休みに活動を行っており、それに向けて週一回ミーティングを行っている。つながる会の活動をより多くの外国につながる子どもたちに知ってもらうため、活動日の1カ月前にはチラシと申し込み用紙を作成し、京都市立小学校、中学校については、教育委員会にご協力いただき、一斉送信メールで各学校宛にチラシを送付してもらっている。フィリピン人団体バグアサと合同で、子どもたちの勉強を支援するたけのこ会も、毎月日曜日に行っている。本活動への参加者は長い間日本に住んでいる、あるいは生まれ育ったという子どもから、渡日して間もない子どもまで様々である。そのため日本語がそれほど得意でない子どももいるが、日本語とルーツの言葉を両方共話す事が出来る子どもやつながる会のスタッフの力を借りて、コミュニケーションをとりながら活動をしている。

2. 代表者および構成員

- ・代表者
井澤七海 社会領域専攻 4回生
- ・構成員
森口菜美 連合教職実践研究科 M1
青木小百合 言語文化コース M1
河合さよ子 言語文化コース M1
坂本歩美 美術領域専攻 2回生
小栗沙和子 理科領域専攻 2回生
山川ゆうり 数学領域専攻 2回生
下村桜棋 理科領域専攻 2回生
松本翔太 技術領域専攻 2回生
秋田真利亜 教育学専攻 1回生
天野小春 国語領域専攻 1回生
辻朱花 国語領域専攻 1回生
大野遥菜 国語領域専攻 1回生
合田悠姫 国語領域専攻 1回生
井戸垣心己 国語領域専攻 1回生
猪本綾音 社会領域専攻 1回生

3. 助言教員

浜田 麻里先生 (国文学科)

第2章 内容や実施経過など

1. 夏の活動①②について

7月 活動内容の考案

チラシ作成・印刷・発送

5・8月 準備。直前ミーティング

8月11日夏の活動①

10:00～

自己紹介 (名前、学年、自分のルーツ、好きな遊び)

バス発

11:00～登山 (大文字山)

13:00 下山

15:00 解散

8月23日夏の活動②

12:00～

自己紹介 (名前、学年、自分のルーツ、好きな食べ物)

12：15～工作

13：00～夏祭り（射的、輪投げ、おかしすくい、ストラックアウト、魚釣りゲーム）

15：30～ハンカチ落とし等

16：00～アンケート、解散

2. 秋の活動について

10月チラシ作成・印刷・発送

準備・直前ミーティング

11月27日秋の活動

12：00～自己紹介（名前、学年、自分のルーツ、好きな食べ物）

12：15～14：00 工作・秋遊び

14：30～体育館遊び（しっぽ取り、ドッジビー）

16：00～アンケート、解散

感染拡大防止のため午後からの開催とした。初の試みで夏に2回の活動を行い、参加者が活動に参加しやすいよう工夫した。新型コロナウイルス感染防止のため学内での活動がほとんどだったが、初めて山登りを実施することができた。今年の活動中止から参加者が減っていたが、チラシやSNSを活用し新規の参加者が大幅に増えた。活動を通して、最初に緊張している様子であった児童生徒が最後には打ち解けて帰っていた。

第3章 結果や成果など

今回は、ほとんどの子どもたちが初参加だった。今年からチラシに力を入れたり、SNSで情報を発信したりした成果が表れた。どのような活動を行っているか情報を発信することで保護者や学校の関係者の方にも安心して参加していただけた。活動で教育委員会の方々に来られた際にも高く評価していただき、今後も情報発信しながら幅広い活動を行っていききたい。

また、学校にいけないあるいは学校で不自由な思いをしている子ども達も、本活動に居場所を見出している様子が見られる。普段参加児童生徒を学校で気にかけている先生方や、付き添いの保護者の方は安心した様子で帰られた。今後もぜひ参加したいという声も多く寄せられた。

第4章 まとめと反省

今年は、1回生が多く活動に興味をもち、意欲的に参加してくれた。2回生も途中から参加があり、スタッフの人数が増えたことで、活動の幅を広げることができた。子どもたちの参加者も増加傾向にあるため、今後も人員確保に向けて勧誘を行っていく必要がある。また、今までは中国ルーツが大半であったが、タイヤフィリピンなどルーツが多様になった。様々な背景をもつ子どもが集まったことで、幅広い交流ができるようになった。

今後の課題は、子ども同士のつながりをつくるというつながる会のテーマを達成できたと感じられる活動を行っていくことである。子どもたち一人ひとりを楽しめているが、子ども同士の関わりがもっと盛んに行われるようにしていきたい。グループで一つの目標を達成したり、遊びを通して自然に関わったりする工夫を考えていきたい。また、長期休みのみの活動となっているため、学校が異なる子ども同士が関わりをもつことに限界がある。活動頻度の見直しなどを行い、外国にルーツをもつ子どもたちの居場所づくりやつながりをつくる場になるよう考えていきたい。

たけのこ会については、新型コロナウイルスの影響により活動内容が変則的であったことからあまり活動に参加出来ていない。たけのこ会も参加者やスタッフが大幅に減っており、今後勧誘活動が必要である。

今後の展望

毎回の活動では保護者の方や教育関係者等、多くの見学者の方がいらっしゃっている状況である。参加者の子どもたちはもちろん、保護者の方にも「活動に来てよかった」と思ってもらえるような活動を心がけていきたいと思う。参加人数が増えてきたからこそ、レクリエーションのグループ分け工夫などして、子どもが自身と同じように外国にルーツを持つ子どもたちと交流し、輪を広げていける状況を作っていきたい。